東京バプテスト神学校　２０１８年　夏期公開講座

「礼　拝　の　本　質　と　教　会　の　活　性　化」

２０１８年8月２０～２２日

越川弘英（同志社大学キリスト教文化センター）

文　　献　　表

ここに記したものは比較的最近出版された日本語で読める文献である。「＊」は基礎的文献、〔K〕は越川の著作または翻訳または編集などを指す）

＊Ｒ・アバ『礼拝』（日本基督教団出版局〔→以下、「教団出版局」〕、１９６１年）

＊Ｗ．ウィリモン『礼拝論入門』（新教出版社、１９９８年）〔K〕

＊Ｗ．ウィリモン『牧会としての礼拝』（新教出版社、２００２年）〔K〕

＊Ｗ．ウィリモン『言葉と水とワインとパン』（新教出版社、１９９９年）〔K〕

Ｗ．ウィリモン『牧師』（新教出版社、２００８年）〔K〕

Ｈ．オールド『改革派教会の礼拝』（教文館、２０１２年）

Ｊ．Ｈ．ウェスターホフ『子どもの信仰と教会』（新教出版社、１９８１年）

Ｗ．クロケット『ユーカリスト～新たな創造』（聖公会出版、２０１４年）

Ａ．シュメーマン『世のいのちのために』（新教出版社、２００３年）

＊Ｆ．セグラー／Ｒ．ブラッドリー『キリスト者の礼拝』（キリスト新聞社、２００９年）

＊Ｊ・Ｄ・デーヴィス『現代における宣教と礼拝』（教団出版局、１９７８年）

＊Ｗ．ナーゲル『キリスト教礼拝史』（教文館、１９９８年）

Ｐ．Ｌ．バーガー『聖なる天蓋』（新曜社、１９７９年）

＊Ｊ．Ｅ．バークハート『礼拝とは何か』（教団出版局、２００３年）〔K〕

＊Ｐ．バスデン『現代の礼拝スタイル』（キリスト新聞社、２００８年）〔K〕

Ｓ．ハワーワス／Ｗ．Ｈ．ウィリモン『旅する神の民』（教文館、１９９９年）

Ｆ．ハーン『新約聖書の礼拝』（新教出版社、２００７年）〔K〕

Ｋ．Ｈ．ビーリッツ『教会暦』（教文館、２００３年）

＊Ｅ．フォーリー『時代から時代へ』（聖公会出版、２００４年）

Ｐ．Ｆ．ブラッドショー『初期教会の礼拝』（教団出版局、２００６年）

Ｗ．ブリュッゲマン『古代イスラエルの礼拝』（教文館、２００８年）

Ｈ．Ｇ．ヘイゲマン『礼拝を新たに』（教団出版局、１９９５年）

＊Ｊ・Ｆ・ホワイト『キリスト教の礼拝』（教団出版局、２０００年）〔K〕

＊Ｊ・Ｆ・ホワイト『キリスト教礼拝の歴史』（教団出版局、２００２年）〔K〕

＊Ｊ・Ｆ・ホワイト『プロテスタント教会の礼拝』（教団出版局、２００５年）〔K〕

Ｄ．ボンヘッファー『説教と牧会』（新教出版社、１９７５年）

Ｄ．ボンヘッファー『共に生きる生活』（新教出版社、１９７５年）

Ｄ．ボッシュ『宣教のパラダイム転換』上・下（新教出版社、１９９９年／２０００年）

Ｊ．Ｊ．マクニール『キリスト教牧会の歴史』（教団出版局、１９８７年）

Ｗ．Ｄ．マックスウェル『改革派教会の礼拝』（一麦出版、２００２年）
＊Ｊ・Ｈ・ヨーダー『社会を動かす礼拝共同体』（新教出版社、２００２年）
Ｊ・ユングマン『ミサ』（オリエンス宗教研究所、１９９２年）
Ｊ・ユングマン『古代キリスト教典礼史』（平凡社、１９９７年）

＊今橋朗『礼拝を豊かに』（教団出版局、１９９５年）
＊小栗献『よくわかるキリスト教の礼拝』（キリスト新聞社、２００４年）
加藤博道『礼拝学日記』（聖公会出版、２０００年）
岸本羊一「礼拝学序論」『総説・実践神学』（教団出版局、１９８９年）
岸本羊一『礼拝の神学』（教団出版局、１９９１年）
北村宗次「礼拝学」『神学諸科入門　第１分冊』（日本聖書神学校発行、１９９０年）
＊越川弘英『今、礼拝を考える』（キリスト新聞社、２００４年）〔K〕
＊越川弘英『礼拝探訪～神の民のわざ』（キリスト新聞社、２００９年）〔K〕
＊越川弘英『礼拝』（教団出版局、２０１３年）〔K〕
竹内淑子／竹内謙太郎『私たちと礼拝』（２００３年、聖公会出版）
原恵／横坂康彦『新版　賛美歌～その歴史と背景』（教団出版局、２００４年）
野田秀『礼拝のこころえ』（いのちのことば社、１９９０年）
鞭木由行『安息日と礼拝』（いのちのことば社、１９９９年）
森紀旦編『聖公会の礼拝と祈祷書』（聖公会出版、１９８９年）
森野善右衛門『礼拝への招き』（新教出版社、１９９７年）
山下萬里『豊かな礼拝を願って』（ヨベル、２００４年）
山下萬里『礼拝に生きる祈り』（ヨベル、２００５年）
山田耕太『新約聖書の礼拝』（教団出版局、２００９年）
＊由木康『礼拝学概論』（新教出版社、１９６１年）
渡辺信夫『教会論入門』（新教出版社、１９６３年）
教団宣教研究所編『聖餐』（教団出版局、１９８７年）
＊教団信仰職制委員会編『新しい式文～試案と解説』（教団出版局、１９９０年）
教団信仰職制委員会編『死と葬儀』（教団出版局、１９９０年）
教団信仰職制委員会編『日本基督教団式文・試用版』（教団出版局、２００６年）〔K〕
教団信仰職制委員会編『日本基督教団式文・試用版Ⅱ』（教団出版局、２００９年）〔K〕
聖書神学舎教師会編『礼拝の聖書的な理解を求めて』（いのちのことば社、２００２年）
教団出版局聖書日課編集委員会『新しい教会暦と聖書日課』（教団出版局、１９９９年）
『洗礼・聖餐・職務』（リマ文書）（教団出版局、１９８５年）

『別冊ＤＣマガジン３・礼拝をつくろう～みんなの資料集』
（全国キリスト教教育主事の会、１９９９年）〔K〕
『礼拝と音楽２００１・臨時増刊・みんなでつくる私たちの礼拝
～１７の礼拝例とアイディア』（教団出版局、２００１年）〔K〕
『世界の礼拝～シンフォニア・エキュメニカ式文集』（教団出版局、２００４年）

J.G.Davis(ed.),The Westminster Dictionary of Worship（1972）
P.F.Bradshaw(ed.),The Westminster Dictionary of Worship（2002）
岸本羊一・北村宗次編『キリスト教礼拝辞典』（教団出版局、１９７７年）
今橋朗・竹内謙太郎・越川弘英編『キリスト教礼拝・礼拝学事典』（教団出版局、２００６年）〔K〕
越川弘英・塚本潤一・水野隆一編『教会音楽ガイド』（教団出版局、２０１０年）〔K〕

季刊誌『礼拝と音楽』（教団出版局）
季刊誌『Ministry』（キリスト新聞社）〔K〕

東京バプテスト神学校　２０１８年　夏期公開講座

「礼　拝　の　本　質　と　教　会　の　活　性　化」

２０１８年8月２０～２２日

越川弘英（同志社大学キリスト教文化センター）

講義Ⅰ　礼拝の本質

「キリスト教礼拝とは、イエス・キリストを中心として行われる、神と神の民の公かつ共同の、出会いと交わりの出来事である」

（越川「礼拝」、『キリスト教礼拝・礼拝学事典』３８７頁）

（１）礼拝の定義

〔この項で出典の明示のない引用は、越川「礼拝」、『キリスト教礼拝・礼拝学事典』より〕

Ａ．礼拝の根拠は「神とその招き」にある〔下記の（３）－Ａ参照〕

・「礼拝が整理する根拠も先行する神の恵みに由来するものであり、人間の応答は神の招きを前提とする。しかし、このような招きは同時に人間の側からの主体的な参与を予期し待望しそれを引き起こす愛のわざでもある。それゆえにキリスト教礼拝とはつねに神と神の民との真実かつ自由な愛の交わりとして成立する出来事なのである。」

Ｂ．「イエス・キリスト」また「聖霊」は礼拝における神と神の民との仲保者である

・「このような出会いと交わりの仲保者として神と神の民の間に働かれる方が主イエス・キリスト〔また聖霊〕である。」

Ｃ．礼拝においてイエス・キリストを中心とする「救済史」が想起される

・「礼拝の場で神の民が経験することはキリストにおいて頂点に達した神の救いの物語（救済史）の想起（→アナムネーシス）であり、この事実に感謝と賛美をささげることであり、またこの物語に全身全霊をもって参与することであり、その物語を世界に向かって宣言し告知することである。」

Ｄ．礼拝は神と神の民との「出会いと交わり」である〔下記の（３）及び（４）参照〕

・「礼拝が出会いと交わりであるということは、そこに「神から人へ」と「人から神へ」という２つの働きが含まれることを意味する。」

Ｅ．礼拝は「公かつ共同」の出来事である

・この出会いと交わりが公かつ共同の出来事であるということは、キリスト教礼拝が神の民全体によって造り上げられる信仰共同体の行為であって、個人的な信心や修行、内面的な敬神行為にとどまるものではないことを意味している。」

＊「それは礼拝におけるひとりひとりの意志や敬虔を否定するということではない。真実のキリスト教礼拝は主にある愛の交わりの中で個々人の存在を掛け替えのないものとして受け入れあいながら、すべての会衆がひとつとなってキリストの体である教会を形作ることをめざすのである。」

・礼拝の公同性とは、それが（信者・未信者を問わず）すべての人に対して開かれた礼拝であることを意味する。

＊『大辞林』によれば、「公同」とは「社会の全体、社会全般、公共」のこと。

（２）礼拝に関する主な用語

〔この項で出典の明示のない引用は、越川「礼拝」、『キリスト教礼拝・礼拝学事典』より〕

Ａ．「レイトゥルギア（希）／リタージー（英）」

・「礼拝を表す用語としてもっとも一般的に用いられる「リタージー」liturgy は、日本の場合、プロテスタントでは「礼拝」、カトリックでは「典礼」、正教会では「奉神礼儀」と訳されてきた。リタージーには「礼拝そのもの」「礼拝式順」「礼拝式文」「聖餐」などの意味が含まれるが、その語源はギリシア語の「レイトゥルギア」leitourgia に由来する。（中略）近年では礼拝における会衆参与の重要性の再発見に伴い、レイトゥルギアの原意に含まれる「人々の働き」「民全体の公的な奉仕」といった点があらためて注目されるようになった。」

Ｂ．「ワーシップ」（英）

・「古英語の weorthscipe に由来し、「崇敬すること」「（対象に）価値を帰することを意味する。それは礼拝が神を崇め神を至上の価値として認める行為であることを示している。」

Ｃ．「サービス」「オフィス」（英）、「ゴッテスディーンスト」（独）

・「英語の service や office、またドイツ語の Gottesdienst といった用語は、礼拝における「奉仕」の性格を示している。こうした理解は前述のレイトゥルギアにも含まれるが、礼拝の本質がすべてを神に献げて仕える行為であることを示唆する。なかでも Gottesdienst は「神の（人間に対する）奉仕」と「神への（人間による）奉仕」という両義的な意味を読みとることのできる表現であり、礼拝が神と人間とのダイナミックな交流の出来事であることを表現する用語であると言えよう。」

Ｄ．「礼拝」（漢字）

・（今橋朗によれば）「礼（禮）」は「礼記」によれば「社会の秩序を保つための規範および道徳観念」の意味を持ち、「とくに目上の人に対する経緯や服従を示す語であり、さらにその服従の態度や感謝を表す行為としての平身低頭（おじぎ）や供物・贈物をさします」といい、「拝」は「手と手を合わせる象形文字に起源を持っていますが、神道儀礼や相撲の所作に見られるように、手を合わせ、また手を開いたり、かしわでを打ったりして、悪意のないことや敬意を示し、さらに「拝舞（はいむ）」といって、頭を垂れる行為を伴って敬意を表すこと。さらに拝官・拝命のように官位を受けること（任官）や、拝見・拝受のように自分の態度が謙虚誠実であることを示すのです」と述べ、「このように礼も拝もキリスト教的な礼拝を表す用語としては不適切不十分なもの」と記している（『礼拝を豊かに』１７頁）。

（３）礼拝における神と人間の関係

〔この項については、越川『礼拝』第１部第１～３章も参照〕

Ａ．「神の愛のわざ」としての礼拝

・礼拝は神の愛の招きによって始まる（「啓示」）

＊「私たちが礼拝するのは、功利的な目的や実用主義的な目的のためではない。そうではなくて、神に愛されているがゆえに私たちは神を礼拝するのだ。（中略）礼拝は、神の愛のもとにとどまるという出来事である。」（Ｗ．ウィリモン『牧師』１０８～１０９頁）

Ｂ．神の愛に対する「人間の応答」としての礼拝

・礼拝は神の招きに応える人間のわざである（「応答」）

＊「礼拝は本質的に応答である。まさに神の恵みの「言」に対する、すなわち、神がわたしたち人間とその救いのためになしたもうたことに対する応答にほかならない。」（Ｒ．アバ『礼拝』１２頁）

Ｃ．世界と人々に仕える「執り成し」としての礼拝

・神と人間の出会いと交わりは執り成し（他者への関心と奉仕）へ展開する

＊「礼拝は教会がこの世に代わって祈る時である。教会は教会自身のために存在するのではなく、世のために存在すると言われるが、教会の礼拝も教会自身のためだけでなく世のために行っていることを忘れてはならない。」（由木康『キリスト教礼拝辞典』３８０頁）

（４）礼拝と教会形成～礼拝における「表現」と「形成」をめぐって

Ａ．礼拝には教会の「表現」と「形成」という働きが存在する

・礼拝は、その教会の「表現」であると同時に、その教会を「形成」する。

Ｂ．礼拝における「表現」の働きについて

・「神の民」（教会／信仰共同体）は礼拝によって自らを「表現」する。

＊「その教会がどんな礼拝式順を持っているか、どんな流れで礼拝を守っているかということは、その教会が礼拝の本質をどのように理解しているかということに関わる問題です。そして、それはまたその教会が礼拝を通してどのような信仰を言い表し、どのような形で神と『神の民』の出会いを実現しようとしているか、どのような宣教の課題や牧会の課題を担おうとしているかということに関わる問題です。礼拝形成の問題を真剣に問うとき、それは必然的に教会形成の問題に結びつくという事実を私たちは知らなければなりません。」（越川弘英『今、礼拝を考える』８６頁）

＊リタージカル・ムーブメントは、たんに礼拝改革ということではなく、「教会の再覚醒運動の一部を成すもの」（A New Dictinary of Liturgy and Worship）であり、「その運動に参与することで、人々はキリスト者としてのアイデンティティを自覚すると共に、それを表現するための方法をも理解した」（J. Fenwick & B. Spinks, Worship in Transition）のである。

Ｃ．礼拝における「形成」の働きについて

・「神の民」（教会／信仰共同体）は礼拝によって自らを「形成」する

＊「今日の礼拝における最大の課題のひとつは、真の意味で会衆が共に作り上げる『神の民のわざ』としての礼拝を再発見し実現していくということにあります。どうしてそれが重要なのかといえば、もし『神の民のわざ』としての『リタージー／レイトゥルギア』（礼拝）を本当に実現することができるとすれば、それはまちがいなく『神の民の集い』である『エクレシア』（教会）そのもののあり方や方向性に新しい大きな力を与えることになるからです。たんに建前や理念の問題としてではなく、まさに現実の問題として、礼拝は教会の中心的活動であり、どのような礼拝を行うかということはその教会の自己理解と宣教の表現であると共に、そうし

た礼拝の実践そのものが教会形成と信徒教育の基盤となります。礼拝形成は教会形成に直結しています。」（越川、前掲書２３４頁）

Ｄ．礼拝における「表現」と「形成」の働きに対する評価・反省・改革

・教会は、礼拝における「表現」と「形成」が、その教会の信仰理解や教会形成のねらいに照らして、適切に機能しているか否かを不断に吟味しなければならない。

＊「それゆえ、問題点は『礼拝を儀式的に行うべきか否か』ということにあるのではなく、『礼拝に集う際、私たちの行う儀式は教会が実現すべき内容をほんとうに表しているか否か』ということにあるのだ。」（Ｗ・ウィリモン『礼拝論入門』９～１１頁／下線は筆者）

＊礼拝における「表現」と形成」の具体的な課題と内容は、「講義Ⅴ　礼拝の副産物～教育、牧会、宣教」で扱う。

東京バプテスト神学校　２０１８年　夏期公開講座

「礼　拝　の　本　質　と　教　会　の　活　性　化」

２０１８年8月２０～２２日

越川弘英（同志社大学キリスト教文化センター）

講義Ⅱ　礼拝のかたち～その構造と順序

（１）礼拝の構成要素と基本的な流れ　〔越川『礼拝』第２部第１章〕

Ａ．礼拝を構成する基本的な「要素」

・キリスト教礼拝の最小の構成単位は、祈り・聖書朗読・説教・賛美・信仰告白・祝福などの「要素」であり、これらの要素を組み合わせて礼拝の「式」が構成される。

・要素は「啓示的要素」と「応答的要素」に分けることができる。

＊「啓示」と「応答」の要素は礼拝の構成・式順において有機的に組み合わされ、礼拝の進行と共により明確かつ強く表現されるものとなることが望ましい。

・主な啓示的要素は、聖書朗読（招詞、聖書朗読、祝福など）、説教、祝福と派遣などを含む。

・主な応答的要素は、祈り（感謝・賛美、祈願・執り成し、罪の告白）、賛美、奉献などを含む。

Ｂ．礼拝の基本的な流れ～「２部構造」と「４部構造」

・歴史的にみるとキリスト教の主日礼拝の大半は「み言葉の礼拝」と「聖餐」から構成される「２部構造」をとってきた。

＊「み言葉の礼拝」も「聖餐」もそれぞれの中で啓示と応答の要素を持っているが、他方、式全体として言えば、前半の「み言葉の礼拝」は啓示的性格が、後半の「聖餐」は応答的性格が中心となる。

＊「２部構造」の礼拝形式はユダヤ教的伝統にまでさかのぼり、２世紀頃までに初期教会の礼拝の統一形式として成立するに至ったと考えられている（F・ハーン『新約聖書の礼拝』１４６頁など参照）。

＊歴史的にみると必ずしもつねに「２部構造」の礼拝がバランスよく実践されていたわけではない。例えば、中世のローマ・カトリックの礼拝は主に後半部に、１６世紀以降のプロテスタントの多くはおおむね前半部に関心が傾きがちであった。

＊日本のプロテスタントの多くは、「説教礼拝」（「み言葉の礼拝」を中心とする礼拝）を主日礼拝の標準的な形式としてきた。このことが礼拝の共同体的性格を弱め、また聖餐にみられる礼拝における応答的性格を弱める結果を生んだという指摘もある。

・近年の礼拝では「２部構造」の前に「招き／集い」の式を置き、「２部構造」の後に「派遣と祝福」の式を置くことで「４部構造」をもつものが教派を問わず増えてきている。

（２）「み言葉の礼拝」について

Ａ．「み言葉の礼拝」とはなにか

・「み言葉の礼拝」は「前ミサ」foremass、「聖餐前部」ante-communion などと呼ば

れることもあり、主として「語り言葉」the spokenn word によって、すなわち、祈り、賛美、聖書（朗読）、説教などによって行われる礼拝形式である。

＊日本のプロテスタント教会の礼拝では、「み言葉の礼拝」は通常の主日礼拝形式そのものとみなされることが多い。

Ｂ．「み言葉の礼拝」の実例①～「日本基督教団口語式文」（１９５９）より

ア．「主日礼拝Ⅰ」	イ．「主日礼拝Ⅱ」	ウ．「主日礼拝Ⅲ」
前奏	前奏	前奏
招詞（聖句）	招詞	入堂
頌栄　または讃美歌	讃美歌	招詞
主の祈	ざんげの勧め	祈祷（潔きを求める祈）
交読	ざんげの祈り	主の戒め
讃美歌	ゆるしの言葉	キリエ
聖書	聖書（旧約と新約）	ざんげの勧めと祈
祈祷	信仰告白（使徒信条）	罪のゆるし
讃美歌	またはニカヤ信条	慰めの言葉
信仰告白（使徒信条）	交読	グロリア・イン
説教	讃詠またはチャント	・エクセルシス
祈祷	牧会祈祷	当日の特祷
讃美歌	主の祈り	旧約聖書
献金	讃美歌	交読
報告	説教	グロリア・パトリ
頌栄	祈祷	新約聖書
祝祷	讃美歌	使徒信条
後奏	奉献と感謝	讃美歌
	報告	説教
	頌栄	祈り
	祝祷	
	後奏	【この後聖餐式に続く】

＊「この式文に収められた礼拝順序は三種あり、教会と牧師とは各自の実状と要求とに応じて、それらを選択使用することができる。第一のものは、在来のものとほとんど変わらない単純なピューリタン的礼拝順序であり、第二のものはプロテスタントの伝統に添った自由教会的礼拝順序に最小限度の式文を配したものであり、第三のものは古代教会以来の歴史的なリタージーを骨子とした聖餐中心の式文である。現在のところ、第一またはそれに類するものを使っている教会が圧倒的に多く、第二はたまに用いられる程度で、第三はほとんど行われていない。しかし、この国の礼拝問題が進展するにつれて、第二、第三のへの漸進的移行が期待される。三種の礼拝順序は、その過度的な形態を示すものとして、暫定的意義を有するであろう。」（由木

康『礼拝学概論』２２２頁／１９６１年）」

Ｃ．「み言葉の礼拝」の実例②～「日本基督教団式文（試用版）」（２００６）より

エ．「主日礼拝式Ａ」	オ．「主日礼拝式Ｂ」
【神の招き】	【神の招き】
前奏	前奏
招詞	招詞
賛美	賛美
罪の告白	祈祷（開式の祈り）
赦しの言葉	頌栄
憐れみの賛歌（キリエ）	
頌栄（グロリア）	
【神の言葉】	【神の言葉】
祈祷（聖霊の照らしを求める祈り）	祈祷（聖霊の照らしを求める祈り）
聖書朗読（旧約書・交読詩編など・使徒書・福音書）	聖書朗読（旧約書・使徒書・福音書など）
賛美	賛美
説教	説教
祈祷	祈祷
賛美	賛美
【感謝の応答】	【感謝の応答】
信仰告白	信仰告白
祈祷（とりなしの祈り）	祈祷（とりなしの祈り）
平和の挨拶	献金（奉献と祈り）
聖餐	主の祈り
	聖餐
【派　遣】	【派　遣】
報告	報告
賛美	賛美
祝福	祝福
後奏	後奏
退堂	退堂

（３）「聖餐」について

Ａ．「聖餐」とはなにか

・聖餐は、「ユーカリスト」eucharist（ギリシア語の「エウカリスティア／感謝」）、「主の晩餐」Lord's Supper、「パン裂き」breaking of bread、「聖餐／聖体機密」

holy communion、「ミサ」Mass、「聖体礼儀」holy liturgy など、様々な名称で呼ばれ（これらの用語は皆、聖餐だけでなく、礼拝全体を指す場合もある）、「語り言葉」と「所作」および「物／物素」によって行われる礼拝形式である。

＊聖餐は、ほとんどすべての教会においてサクラメント（聖礼典、秘蹟、機密）のひとつとみなされてきたが、プロテスタントの中にはサクラメントそのものを実施しない教会（救世軍、クェーカー、無教会派など）も存在する。

・サクラメントは多様な象徴性を有するものであり、聖餐に関していえば、ホワイトは「感謝」「交わり／親交」「想起」「犠牲」「臨在」という５つの主要なテーマと「聖霊のわざ」と「終末的次元」という２つの副次的なテーマを挙げている(ホワイト『キリスト教の礼拝』３５３頁以下)。今橋朗はこうしたものに加え「解放と社会正義」という主題を掲げる（『礼拝を豊かに』９３頁）。

Ｂ．「聖餐」の実例①

～「日本基督教団口語式文」（１９５９）と「新しい式文」（１９９０）より

ア．「主日礼拝Ⅰ・Ⅱ」	イ．「主日礼拝Ⅲ」	ウ．「新しい式文（Ⅱ）」
		【聖　餐】
序詞	奉献	奉献（平和の挨拶が続く）
制定語	頌栄	勧めの言葉（とりなしの祈り
祈祷	讃美歌	を含む教会の祈りが続く）
招詞	勧め	神への讃美
分餐	とりなしの祈り	主の制定の言葉
感謝の祈祷	スルスム・コルダ	聖霊の働きを求める祈り
讃美歌	序唱	主の祈り
	サンクトゥス	パンを裂くこと
（この後、以下に続く）	聖別の祈［制定語を含む］	陪餐
献金	主の祈り	感謝と献身の祈り
報告	アグヌス・デイ(神の小羊)	【応　答】
頌栄	祈祷	讃美
祝祷	分餐	献金
後奏	感謝の祈	報告
		【派　遣】
	祝祷	頌栄
	退堂	祝祷
	後奏	奏楽

Ｃ．「聖餐」の実例②～「日本基督教団式文（試用版）」（２００６）より

エ．「主日礼拝式Ａ」	オ．「主日礼拝式Ｂ」
＊奉献 主の食卓への招き 感謝聖別祷 ＊　心を高く挙げよ （スルスム・コルダ） 叙唱 ＊　聖なるかな（サンクトゥス） 感謝の祈り 聖霊の働きを求める祈り （エピクレーシス） 頌栄 陪餐 ＊　主の祈り ＊　パン裂き ＊　神の小羊（アニュス・デイ） ＊　分餐 ＊　陪餐後の感謝の祈り	序詞 制定の言葉 聖霊を求める祈り（エピクレーシス） 陪餐 ＊感謝の祈祷

「＊」は会衆一同、または司式者と会衆の交読の形で行う部分を示す

（４）キリスト教礼拝の多様性と分類

Ａ．キリスト教礼拝の多様性

・キリスト教会の諸教派・諸教会の中には、「２部形式／４部形式」をとらない礼拝を実践するものも存在する。

＊「プロテスタント礼拝の豊かさとは、その多様性にあるのであって、またその多様性ゆえに広くさまざまな立場の人々に仕えることができる可能性にあるからである。」（ホワイト『プロテスタント教会の礼拝』３９５頁）

＊「キリスト教礼拝全体の礼拝という大きなコンテキストにおけるプロテスタント礼拝の役割は、開拓者としてのそれである。（中略）プロテスタント礼拝における特別の使命とは、人間を取り巻く社会的コンテキストと人間そのものが変化していく中で、キリスト教礼拝をそうした人々に適した表現形式へと改めていくことである。」（ホワイト同上４０１頁）

Ｂ．現代におけるプロテスタント礼拝の分類（１）～Ｊ・ホワイトの場合

・Ｊ・ホワイトは、教派的な伝統とその展開を指標として９種類のプロテスタント礼拝の分類を行っている（詳細は『プロテスタント教会の礼拝』参照）。

・「ルター派の伝統」は１６世紀のマルティン・ルターに起源し、比較的カトリック的な要素を多く残しながら、自国語礼拝や賛美歌（コラール）などを特徴とする。
・「改革派の伝統」はツヴィングリ、ブツァー、カルヴァンなどの宗教改革者たちに起源し、「聖書原理」をさらに強調し、連続講解説教や詩編歌などを特徴とする。
・「再洗礼派の伝統」はツヴィングリの改革から派生し、成人洗礼のみを実施することを特徴とするが、礼拝の一般的内容は改革派に近い。
・「アングリカン（聖公会）の伝統」はカトリック的要素を多く残す一方、『祈祷書』による礼拝の実践と会衆参与が大きな特徴。
・「分離派とピューリタンの伝統」はアングリカンと改革派の影響のもとで生まれた伝統で、徹底した「聖書原理」を志向し、説教重視、自由祈祷、簡素な礼拝形式など、また礼拝に関する各個教会の自主自立を主張する。
・「クェーカーの伝統」は聖霊の働きかけを重んじ、いわゆる「沈黙の礼拝」と言われる独自の礼拝形式を特徴とする。サクラメントを認めない。
・「メソディストの伝統」はアングリカンの伝統から派生したもので、説教などの「み言葉の礼拝」と並ぶ恵みとしての聖餐の重視、多彩な賛美歌などを特徴とする。
・「フロンティア派の伝統」は１９世紀北米のリバイバルにおいて野外礼拝（キャンプ・ミーティング）を背景として生まれ、伝道的性格の強い説教や賛美歌、「３部構成」（賛美・説教・「収穫（ハーベスト）」）の礼拝順序などを特徴とする。
・「ペンテコステ派の伝統」は２０世紀に北米で生まれ、聖霊の働きかけを重んじ、聖霊のバプテスマ、異言、様々な形での会衆の礼拝参与、きわめて自由かつ柔軟な礼拝の形式や順序などを特徴とする。

Ｃ．現代におけるプロテスタント礼拝の分類（２）～Ｐ・バスデンの場合
・Ｐ・バスデンは歴史的社会的文化的な起源と特徴によって５つの分類を行っている（詳細は『現代の礼拝スタイル』参照）。
・「リタージカル・スタイル」は古代・中世以来の礼拝の２部形式の伝統に立つもので、カトリックのほかプロテスタントの中のルター派や聖公会の礼拝形式も含まれる。説教と聖餐の強調、定型の成文祈祷、特定の礼拝音楽の使用などといった要素と結びつき、いわゆる「形式張った」印象を持つスタイル。
・「トラディショナル・スタイル」は１６世紀にカルヴァンなどによって採用された聖書と説教を重視する礼拝、また１７世紀の英国のピューリタンや自由教会（後の組合教会やバプテスト教会などを含む）にも広まった。リタージカル・スタイルよりも全体的に簡素で詩編歌などの賛美歌の使用や釈義説教を特徴とする。
・「リヴァイヴァリスト・スタイル」は、１６世紀のツヴィングリ、１７世紀のクェーカー、１８世紀のメソディストなどに由来するとされ、とりわけ１９世紀の北米の「フロンティア派の伝統／リヴァイヴァルの伝統」に直接的に由来する。未信者や求道者への伝道的関心がきわめて強く打ち出されており、伝道的な説教、独特の「福音唱歌（ゴスペル・ソング）」、「３部構成」の礼拝形式などを特色とし、サクラメントへの関心は一般に低いとされる。
・「プレイズ・アンド・ワーシップ・スタイル」は近代の北米の黒人礼拝、２０世紀

のペンテコステ派の礼拝に由来する礼拝。柔軟な礼拝構成・順序、生活に密着した具体的な説教、会衆の自発的かつ自由な応答的参与の重視、黒人霊歌に由来するゴスペルソングや「プレイズ＆ワーシップ・ソング」などの礼拝音楽を用いる。賛美をリードする「プレイズ・チーム」のようなグループが大きな役割を担う例が多い。サクラメントへの関心は一様ではなく、頻繁に洗礼・聖餐を実施する場合もあれば、そうでないこともある。またペンテコステ派系の礼拝では、「癒し」や「異言」などの要素が含まれる場合もある。

・「シーカー・サービス・スタイル」は１９８０年代以降、北米でビル・ハイベルズ（ウィロー・クリーク・コミュニティ教会）やリック・ウォーレン（サドルバック・バレー・コミュニティ教会）が始めた礼拝スタイルとされるもので、「求道者（シーカー）」（ノン・クリスチャンの人々）を主たる対象とする伝道重視のスタイル。「求道者（シーカー）」の状況に対応して礼拝の時間や内容が設定されており、彼らの「切実なニーズ felt needs」を取り上げた説教、またドラマ形式でのメッセージの伝達などを特徴とする。奉献（献金）を行わない場合もあり、サクラメントはまったく行われない。

東京バプテスト神学校　２０１８年　夏期公開講座

「礼　拝　の　本　質　と　教　会　の　活　性　化」

２０１８年8月２０～２２日

越川弘英（同志社大学キリスト教文化センター）

講義Ⅲ　礼拝のかたち～救済史と教会暦

（１）救済史について

Ａ．「救済史」とはなにか

・「救済史」とは神による世界と人間の救いについての物語であり、それはキリスト教会とキリスト者のアイデンティティを形作る根幹となる。

＊『旧約新約聖書大事典』によれば、「救済史」とは「神による民の導きの物語で、その内容や思想傾向は必ずしも画一的ではない。民はこの物語を通じて自己の存在の意味を確認する」とある。

Ｂ．救済史における５つのポイント

・救済史の流れを構成する主要なポイントして、「創造」「堕罪」「救いの計画」「イエス・キリスト」「終末」を挙げることができる。

・「創造」において、キリスト教は、神が創造者であること、人間と世界が本質的に「良いもの」であるという基本的な信仰を確認する。

＊「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。」（創世記１・３１）

・「堕罪」において、キリスト教は、現存在としての人間が罪に陥った存在であり、この世界が本来の姿から転落しているという現実を確認する。

＊「主なる神はアダムを呼ばれた。『どこにいるのか。』」（創世記２・９）

・「救いの計画」において、キリスト教は、神が私たちに人間とこの世界に対して、愛をもって関わりつづけてくださっていることを確認する。

＊「主はアブラムに言われた。『（中略）祝福の源となるように。』」（創世記１２・１，２）

・「イエス・キリスト」または「受肉」において、キリスト教は、神の愛の究極的な現れとして神の独り子がこの世に与えられたこと、そしてその生涯と十字架、復活を通して救いのわざが成就したことを確認する。

＊「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。」（ヨハネ福音書３・１６）

・「終末」において、キリスト教は、最後に来るべきものが神の愛の完全な成就であることを確認する。

＊「わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。」（ヨハネ黙示録２１・１）

・キリスト教教会とキリスト者はこのような「救済史」における過去と未来の「中間時」としての「今・ここ」に存在する。

（２）教会暦の意義と構造

Ａ．教会暦の本質

・教会暦（典礼暦年）Christian year/Liturgical year/Church year とは、１年間をサイクルとする教会独自の暦であり、それぞれの期節や主日のテーマは救済史の流

れに沿って形成され整えられている。

＊北村宗次によれば、「教会暦」とは「日曜日の公同礼拝を中心とした１年を周期とする教会の暦であるが、主としてイエス・キリストの生涯と死と復活を記念することによって構成されている。」（『キリスト教礼拝辞典』８８頁）

・教会暦は教会共同体の一致（共同体意識）を高めると共に、共同体の存在の意味・根拠・在り方・進むべき方向性などを示唆・確認するものであり、またそれらを想起・記念することを通じて「強力な教育力を発揮」（今橋朗『礼拝を豊かに』１１５頁以下）するものでもある。

＊教会暦とは、ある意味において時間を『キリスト教化』する試みであり、それを通して教会共同体を形成するための試みでもある。

・教会暦は１年間の礼拝計画の土台となるものであり、その内容は各主日のテーマに対応して配置された「聖書日課」によって具体的に表現される。

＊「『教会暦』と『聖書日課』は、長い歴史の中で形づくられてきた教会の貴重な遺産です。これによって、聖書の出来事を周期的に記念し、時間的、地域的、教派的に隔たっている教会が、信仰においてひとつに結ばれます。」（『日毎の糧２０１７』３０頁）

＊「私たちが何らかの礼拝計画を立てようとする場合、まず最初に問うべきことは、『その礼拝は教会暦のどの時期に行われるのか』という問いである。この問いに対する答えこそ、私たちが礼拝計画を立てる上で、最初の、そして最善の手がかりとなるものである。」（Ｊ・Ｆ・ホワイト『キリスト教の礼拝』１０５頁）

Ｂ．教会暦の基本構造

・伝統的な教会暦は、３つの主な祝祭日とその前後の期節から構成される。

・教会暦の最初は、「降誕日／降誕祭」（クリスマス）を中心として、その前にあたる「待降節／アドベント・シーズン」、そしてその後の「降誕節／クリスマス・シーズン」から構成される。

＊待降節は１２月２５日より前の日曜日から数えて４週前の日曜日から始まる。降誕節の終わりは１月６日の「公現祭」である。

・次に、「復活日／復活祭」（イースター）を中心として、その前の「受難節／レント・シーズン」、その後の「復活節／イースター・シーズン」から構成される。

＊「復活日」は毎年移動し、春分の日の次に来る最初の満月の次の日曜日とされており、「受難節」の始まりはその日から４６日前の「灰の水曜日である。「復活節」は５０日続く。

・さらに「聖霊降臨日／聖霊降臨祭」（ペンテコステ）を中心として、（その前は「復活節／イースター・シーズン」）、その後の「聖霊降臨節／ペンテコステ・シーズン」（または「三位一体節」）から構成される。

＊教会暦の各期節のおおよそのテーマとイメージは、待降節がキリストの降誕と再臨を待ち望む期節であり、それらを覚えつつ自己を振り返る期節でもある。降誕節はキリストの誕生を祝う喜びと感謝の期節、受難節はキリストの受難と共に私たち人間の罪の現実を覚え、悔い改めと克己に努める期節、復活節はキリスト教の復活を祝う期節。また一般に聖霊降臨節は初期教会の歩みやキリスト教信仰の様々な面を顧みる期節である。

＊「換言すれば、教会暦とは、１年の中の特定の１日や一夜を『点』として守るというよりも、

ある程度の長さを持った期間を『線』として守るようなかたちで形成されてきたものだったと言えるでしょう。そしてそのような『線』としての教会暦を守る具体的な工夫こそ、それぞれの祝祭日や期節のテーマに対応する聖書箇所を選び、それらを継続的に朗読し、そうした行為を通して先述した『記念』〔アナムネーシス〕を実践するということだったのです。」（越川弘英『日毎の糧ガイド～６年サイクル週日聖書日課を用いるために』１３頁）

＊日本基督教団の場合、「降誕前期」から「聖霊降臨日／聖霊降臨祭」までを「キリストの半年」、その後から次の「降誕前期」までを「教会の半年」というふうに区分する考え方をしている。

＊日本基督教団の教会暦は、イギリスの「合同典礼研究委員会」ＪＬＧの考案した教会暦を基礎として用いている。この教会暦の最大の特徴は、伝統的なアドベント・シーズンに先立つ５主日を教会暦の新年度に加え、この期間を旧約聖書における神と神の民の歴史を記念する時として位置づけた点にある。

（３）礼拝における教会暦の実際的な活用と課題

Ａ．聖書日課

・聖書日課とは、教会暦に基づき、各主日の礼拝で朗読すべき箇所として指定された聖書箇所（及びその一覧表）のことである。

＊「教会暦をキリスト教礼拝の土台とみなすとすれば、聖書日課 lectionary もしくは聖書日課表 list of lectionary はまさにその礎の上に建てられた建物の一階部分であると言えよう。」「聖書日課は他のいかなる手段にもまさって、それぞれの特定の主日にふさわしいもろもろのことがらを選択する上での導き手となる。すなわち、聖書日課の内容は、開会の祈り、詩編、賛美歌、聖歌隊や奏楽者の選曲、説教、そして視覚的な礼拝の祭具などに反映される。聖書日課を使用することは、数ヶ月先、または数年先までの礼拝計画の立案を可能にする。こうしたことはとりわけ準備する必要のある教会音楽や礼拝美術の担当者にとって有益である。」（Ｊ・Ｆ・ホワイト、前掲書１０９、１１２頁）

＊聖書日課は教会暦を土台として形成されており、教派や伝統によって、その具体的内容（何年間をひとつの単位とみなすか、個々の聖書箇所の選択など）はそれぞれ異なる。例えば日本基督教団は四年サイクルだが（『日毎の糧２０１５～主日聖書日課・家庭礼拝暦』は第３年目〔Ｃ年〕に当たり、今年の秋からＤ年が始まり、順次Ａ年、Ｂ年に移り、再びＣ年に戻る）、カトリックや日本聖公会はそれぞれ別個の三年サイクル日課表を使用する。またカンバーランド長老教会などはアメリカで多く用いられている三年サイクルの「改訂共通聖書書日課」ＲＣＬを用いている。

＊聖書日課は、通常、その主日礼拝で朗読する箇所として、旧約聖書から一箇所、新約聖書の使徒書から一箇所、また福音書から一箇所が選ばれている。詩編はこれらの日課への「応答の祈り」という意味で選ばれており、これら４つを活用する場合、一般的には、旧約聖書の日課→詩編（交読又は詩編歌）→使徒書の日課（→応答唱「ハレルヤ唱」）→福音書の日課という順番になる。

＊聖書日課の歴史の概要は、後藤憲正「聖書日課」（『礼拝・礼拝学事典』２１７頁以下）を参照。

Ｂ．賛美歌や祈祷など

・教会暦及び聖書日課は、賛美歌・奏楽曲の選択や祈祷の内容と密接に関わっており、礼拝計画を立てる上で有効なよりどころとなる。

＊教会暦に対応した祈祷集として、越川弘英・吉岡光人編『主日礼拝の祈り』（２０１７／日本基

東京バプテスト神学校　２０１８年　夏期公開講座

「礼　拝　の　本　質　と　教　会　の　活　性　化」

２０１８年8月２０～２２日

越川弘英（同志社大学キリスト教文化センター）

講義Ⅳ　礼拝のかたち～レイトゥルギア

（１）「教会／エクレシア」と「礼拝／レイトゥルギア」

Ａ．「教会／エクレシア」について

・「教会／エクレシア」とは、本来、「組織」「建物」「制度」ではなく、「神の民の集い」を意味する。

＊「エクレシア」ekklesiaという用語：「古典ギリシア語においては（中略）この語は投票権を持つ自由人男子によって構成される市民集会を表す述語になっていた。（中略）／新約の絶対多数の用例個所において、エクレシアは特殊な意味を帯びたキリスト教用語として用いられる。従って、〈Gemeinde〉［会衆、地域教会］、あるいは〈Gemeindeversummlung〉［地域教会の集会］、あるいは〈Kiriche〉［教会］と訳出するのが適当である。（中略）即ちここで注意すべきは、ドイツ語に固有な〈Gemeinde〉（一定の場所におけるキリスト教徒の集まり）と〈Kiriche〉（Gemeindeの枠を越えた神の民の集まり）との区別は新約には無縁であること、そしてこのことは更に、原始キリスト教はエクレシアを、第一義的には組織的な存在ではなく、神学的な存在と理解していたことと密接に関連している、ということである。」（『ギリシア語新約聖書釈義事典Ｉ』４６９頁／一部表記変更）

Ｂ．「礼拝／レイトゥルギア」について

・「礼拝／レイトゥルギア」とは、礼拝といういとなみが特定の人々（例えば、祭司や牧師）のわざではなく、「神の民のわざ」であることを意味する。

＊「レイトゥルギア」leitourgiaという用語：「（レイトゥルギアに関連する）この語群は、ギリシア語ではおおかた（政治的共同体としての）国民に仕えるという世俗的な意味で用いられている（イオニア方言で言うレイトス［国民に関する］とエルゴン［仕事、職務］を語源的に一緒にしたものと対応している）。税や一般的な職務に関する公的な使用例が殆どであるが、ヘレニズムの時代には、特に碑文の中で、しばしば祭儀的な関連でも使われている。（中略）／七十人訳では、この語は明らかに祭儀的な意味で用いられている。（中略）祭司たちやレビ人たちの神殿奉仕を表す述語として用いられ、これらの述語が祭司と祭儀について使用されている限り、殆どの場合ヘブライ語のシェレトscheretあるいはアボーダーabodahの訳語である。（中略）しかも時折、異邦人の祭儀にも使用される。（中略）／新約では、この語は３箇所で神殿における祭司たちの務めに関係づけられている（ルカ１：２３「務めの期間」、ヘブ９：２１「礼拝のために用いる・・・」、１０：１１「毎日礼拝を・・・」）。」（『ギリシア語新約聖書釈義事典Ⅱ』４０８頁以下／一部表記変更）なお、パウロ書簡にはこの語群を「奉仕」（第２コリント９：１２）や「仕える者・奉仕者／レイトゥルゴス」（ローマ１５：１６、フィリピ２：２５）というふうに転義的に用いる例がある。また使徒言行録１３章２節には「レイトゥルゲオー」を「礼拝する」と訳した例が出てくる。

＊「それ〔レイトゥルギアの意味するもの〕は万人祭司制の真髄と言うべきものであって、そこ

ではキリスト教共同体の全員が祭司的な役割を分かち合うのである。だから、礼拝が『リターージカルである』と表現される場合には、それは礼拝参加者全員が共に礼拝を守るために各人がそれぞれの役割を果たしている状態のことを意味するのである。」（Ｊ・Ｆ・ホワイト『キリスト教の礼拝』４０頁）

Ｃ．「神の民の集い」と「神の民のわざ」～教会と礼拝

・「神の民の集い」としての教会は、「神の民のわざ」を行うために礼拝に集う。

・「神の民」は主日の礼拝においてもっとも凝縮された可視的な形で出現する。またそれは、週日においてこの世に派遣され拡散した形で存在する。

・礼拝は第一義的な「神の民のわざ」であり、他のあらゆる「神の民のわざ」の源泉となる。

＊「典礼は教会の活動が目指す頂点であり、同時に教会のあらゆる力が流れ出る泉である。（中略）典礼自身は、『復活の諸秘跡』に満たされた信者が、『愛によって一つの心に結ばれる』よう励まし、『信仰によって知ったことを、生活において保つ』よう祈る。」（『第２バチカン公会議公文書全集』１０頁／「典礼憲章」１０）

Ｄ．「私たちの礼拝は「レイトゥルギア」になっているだろうか？」という問い

・礼拝における「牧師中心主義」「説教（者）中心主義」「少数者による礼拝の企画・運営」などは、礼拝主体としての大多数の会衆を受動的な位置に追いやってきたのではないだろうか。

＊礼拝における牧師や司式者の位置づけは、神と神の民がよりよいかたちで出会いと交わりを実現するための「仲保者」ということにある（「牧師・司式者⇒会衆」ではなく、「神⇔（牧師・司式者）⇔会衆」）。

・礼拝における会衆の「当事者意識」、積極的かつ具体的な礼拝への参与を促すことは、その人自身の信仰生活のみならず、教会共同体の形成・変革にも繋がる課題である。

（２）礼拝における積極的な会衆参与の課題と方法

Ａ．会衆の礼拝参与①～奉仕と役割の分担

・教会のメンバーによる積極的な礼拝参与のひとつの方法は、礼拝における個々の役割の奉仕によって行われる。例えば、司式者、奏楽者、聖歌隊、ソングリーダー、聖書朗読者、祈祷担当者、奉献係（献金係）、聖餐補助者、洗礼補助者、通訳、手話通訳、受付、案内（アッシャー）、オルターギルド（祭壇係）、ＯＨＰやパワーポイントの操作、録音・録画の係、インターネット配信の係などである。

＊「みんなでできることをひとりでする必要はないじゃないですか。」（加藤博道）

・礼拝への参与の方法や役割分担は多様であることを覚えておく必要がある。

＊特定の個人を記念・祝福することの意味と必要（召天者、受洗記念、誕生記念など）

＊カトリック教会で実見した「何の仕事もしない天使」について

Ｂ．会衆の礼拝参与②～「礼拝委員会」

・牧師、奏楽者、聖歌隊、その他礼拝奉仕に関心のある人々から構成される「礼拝委員会」を組織することを通して、礼拝の計画と反省の恒常的実践に関する会衆参与

が可能となる。

＊人数の少ない教会では、具体的な礼拝計画や反省について全員が参加できるような機会を定期的に設けることで、会衆の礼拝参与を促すことも考えられる。こうした会は学習会や懇談会などと異なり、実際に礼拝の内容について会衆の意見や判断を反映することが主たる目的となる。

（３）礼拝委員会の課題と運営

Ａ．礼拝委員会の課題～礼拝の計画・実践・反省

・礼拝は教会のもっとも重要かつ中心的な営みであるがゆえに、それは十分な配慮にみちた計画と準備、実践、そして反省と評価を必要とする。礼拝委員会はこれらの課題に関する仕事を担当する。

＊「意味深い礼拝というものは自然に生じるようなものではない。そのためには深い配慮に満ちた準備が必要である。そうした準備の中には、礼拝を計画すること、導くこと、そして評価することといった三つの段階が含まれている。」（Ｐ・バスデン『現代の礼拝スタイル』１８０頁）

＊礼拝の計画と反省の具体的な示唆については、Ｗ・ウィリモン『礼拝論入門』（第１、２、８章）、Ｐ・バスデン『現代の礼拝スタイル』（第Ⅲ部・第９～１１章）、Ｆ・Ｍ・セグラー＆Ｒ・ブラッドリー『キリスト者の礼拝』（第Ⅲ部・第２１～２３章）を参照せよ。

Ｂ．礼拝の計画・準備

・礼拝の計画・準備は１年程度を単位とする長期的なものと、１ヶ月ないし数週間を単位とする短期的なものに分けることができる。

・長期的な計画・準備では年間のおおよその礼拝の特徴・必要を概観する。

＊この場合、教会暦（及び行事暦）を中心に礼拝計画を立てることはきわめて有効である。教会暦と各主日のテーマ、聖書日課を基礎にすることで、賛美歌、祈祷など、礼拝の主要な要素をあらかじめ長期間にわたって確定することが可能となり、説教者、奏楽者、聖歌隊・ソングリーダーなど、礼拝奉仕者は先々までを見通した準備ができることとなる。

・短期的な計画・準備では直前に迫った１ヶ月程度先までの礼拝の内容・奉仕担当者の役割分担などを検討・確認する。

Ｃ．礼拝の実践に際して

・礼拝当日になすべきこととして、礼拝環境の整備・確認（空調や照明や音響などの機器、会衆席や聖書朗読台、受付のチェックなど）、奉仕担当者による礼拝直前の短い打ち合わせ、新来会者など必要な情報の共有といったことが挙げられる。

Ｄ．礼拝の反省と評価

・実践された礼拝については、事後に必ず反省と評価を行う。ことに何か新しい試みを行った場合には必ず実施する。

・礼拝そのものにおいて、事前に計画・準備したように進行しているか、問題や手違いなどが生じていないかを確認する。また、予期していた以上にうまくいったこと、想定外のことで積極的肯定的な出来事が生じたことなどに注意を払う。

Ｅ．礼拝マニュアルや祈祷集の作成

・新来会者を含む会衆のための礼拝に関する基本的な解説、礼拝順序に沿ったそれぞ

れの場面や行為の意味と心得を記したマニュアルの作成。

・礼拝で用いる祈祷文（集）の作成。実際に礼拝で用いる祈りを作成し、実用化することは、信徒の礼拝形成や教会形成への参与を高める方法として、また「祈りの教育」として重要な意味を含んでいる。

（４）礼拝の学びと変革について

Ａ．礼拝の基本的な知識や様々な課題を学ぶ必要性

・礼拝についての基本的な学び、自分たちの教会の礼拝の意味や特徴についての学びを、意識的に継続して実行する必要がある。

＊自分たちの教会の礼拝が唯一の礼拝方法ではないこと、それぞれの礼拝のやり方の伝統、性格、特徴を知ることによって、自己を相対化し、建設的批判的に自らの礼拝を見つめる姿勢を養うことが可能となる。

＊日本の多くのプロテスタント教会では、「説教礼拝」が支配的な位置を占めてきたという事実、その長所と短所を学ぶ必要がある。さらに、祈祷（主に成文祈祷）や新しい賛美歌（集）の学びと活用、礼拝の伝統の再発見や会衆参与の重視といった近年の礼拝における新たな理念や方向性について学ぶことが求められる。

Ｂ．礼拝を変える場合の課題（聖書や賛美歌集などの変更を含む）

・礼拝の式順や内容に大きな変更を加えようとする場合、もっとも大きな課題は教会全体の意見を踏まえることであり、変革そのものと同時に、そこに至る過程を注意深く見守り、その影響を継続的に見守る必要がある。

・礼拝の改革を行う場合、その理由、目的、変更する内容を明確にし、その変更が必要であることを確認した上で実践しなければならない。

＊「牧師が従来の礼拝パターンの果たす機能についての明確な理解をもつに至るまでは、そしてまた神の民としての会衆の活力と忠誠を保つために礼拝刷新が不可欠だと感じられるのでなければ、会衆が慣れ親しんでいる礼拝パターンを変えるべきではない。」（Ｗ・ウィリモン『礼拝論入門』１１頁、またこのページ以降の「礼拝を刷新するためのガイドライン」部分を参照）

＊「礼拝の変化は避けられないし、必要である。礼拝はわたしたちが望もうが望むまいが、変化する。（中略）構造、コンテクスト、場所、神学のいずれの変化も教会の礼拝に影響を与える。」（Ｆ・Ｍ・セグラー＆Ｒ・ブラッドリー『キリスト者の礼拝』３０９頁）

＊上記のウィリモンとセグラーらの主張はいずれも真実であり、両者は一定の共通認識のもとで、礼拝における変化や刷新の可能性と必然性を論じている。私見によれば、これまでの日本のキリスト教会は礼拝の問題も含めて「変化・刷新すること」で新たな問題に直面するというよりも、「変化・刷新しないこと」で問題を抱え込みつづけてきた面が強いように思われる。

督教団出版局）、また聖公会『祈祷書』などを参照。

C．教会暦に対応した可視的感覚的なシンボルの活用

・教会暦を可視的な形で表現する工夫として、典礼色（各種の垂れ布、ストールなどに用いる）、ロウソク、バナー、その他の期節的なシンボルの活用が考えられる。

＊典礼色の意味や活用は教派や伝統によって多少相違するが、おおよそ「白は、神の栄光、勝利、復活、喜び、清らかさの象徴で、（中略）降誕節、復活節、キリストの神秘を祝う（公現、洗礼、変容、復活、昇天などの）祝祭日、聖母、天使、聖人の祝祭日、洗礼、堅信、初聖体、叙階、結婚の各儀式の時に、また復活を強調するために葬儀の時にも白を使うようになってきている。赤には２つの象徴がある。１つは火（聖霊）を表す場合で、聖霊降臨の祭日に用いられる。もう１つは血（命までささげ尽くす愛）を表す場合で、主の受難の主日、聖金曜日、また殉教者の祝祭日に用いられる。みどりは成長していく新芽の色で、天の国への旅を導く希望を意味し、年間に用いられる。紫は回心、節制、悲しみを表す色で、待降節、四旬節、葬儀などに用いられる。」（白石満「典礼色」『礼拝・礼拝学事典』２９０頁』）この他に、金、バラ色、青、黒など、さらにそれらの色を組み合わせて用いる教会もある。

＊教会暦に関わるロウソクの用い方として、アドベントやレント（「テネブレ」）における点灯数の増減による活用、イースター・キャンドルの活用などが挙げられる。

＊シンボルというものは特定の期節だけ用いられることで明確なメッセージを発信すると同時に、通常そこにあるものがある期節にはなくなる（取り去られる）ということによってもメッセージを発信する。レント期間中だけ、「茨の冠」を礼拝堂に吊り下げる、またこの期節には花を飾らないなどの工夫が考えられる。

D．教会暦と「聖人暦」や「行事暦」などとの関わりについて

・特定の教派や教会のもっている特殊な暦（「聖人暦」「行事暦」など）と通常の教会暦の関係について、その優先性や理由について、教会はあらかじめ検討し決定しておかなければならない。

＊聖人暦（通常はその聖人の亡くなった日を記念日とする）の誕生は教会暦よりも早く、聖書に登場する人物や歴史上の卓越した信仰者などを記念する暦として発達した。

＊便宜上ここで「行事暦」と記しているのは、特定の歴史的背景や地域的背景などのもとで守るようになってきた記念日のことで、特定の教会や教派だけに関わるもの（例えば、その教会・教派の創立記念日など）、それらを越えてある程度の広がりを持つものなど、様々である。

＊日本基督教団の場合、「行事暦」として、「元旦礼拝」（１月１日）、「信教の自由を守る日」（２月１１日）、「母の日」（５月第２主日）、「子どもの日（花の日）」（６月第２主日）、「平和聖日」（８月第１主日）、「世界聖餐日・世界宣教の日」（１０月第１主日）、「宗教改革記念日」（１０月３１日）、「聖徒の日（永眠者記念日）」（１１月１日）など２０項目が挙げられている。

東京バプテスト神学校　２０１８年　夏期公開講座

「礼　拝　の　本　質　と　教　会　の　活　性　化」

２０１８年8月２０～２２日

越川弘英（同志社大学キリスト教文化センター）

講義Ⅴ　礼拝の副産物～教育、牧会、宣教

〔この「講義Ⅴ」で扱う内容は、「講義Ⅰ－（４）」で取り上げた礼拝における「表現」と「形成」の働きに関わるものであり、その具体的内容と課題を教会の主要な活動である３つの領域において考察するものである。〕

（１）礼拝の副産物とその評価について

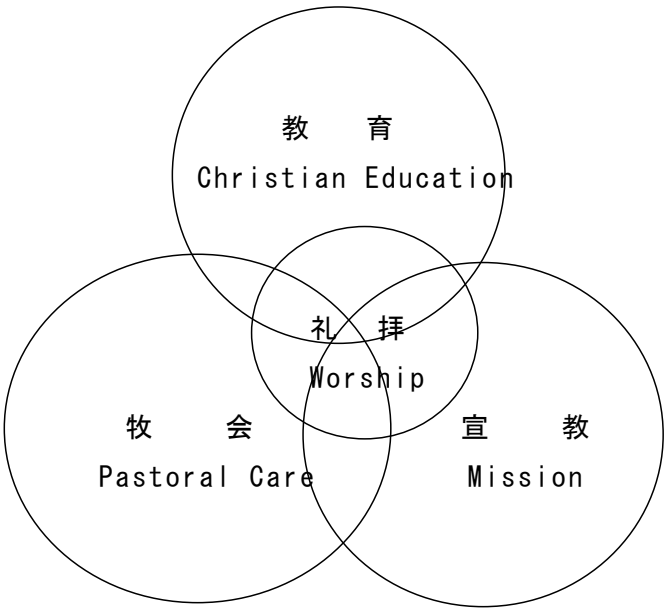
Ａ．礼拝の副産物とは何か

・礼拝は神と神の民の出会いと交わりとして完結する営みであり、それ自体が目的となるものである。しかしそれと同時にすべての礼拝は必然的に教会を表現し形成する力を発揮する。そうした礼拝の力は、教会の主要な働きである教育、牧会、宣教に結びついている。

＊「カール・バルトは次のように語っている。『共同体が教育を受けたり自分自身を教育したりすることは、礼拝の場でだけ起こるわけではない。しかし、礼拝こそ継続的な教育がまず最初になされる場である。そうした教育が礼拝の中で行われなければ、それ以外のいかなる場でも行われることはない。』共同体が礼拝をしなければ、それはキリスト教共同体とは言えない。そして礼拝が共同体を作り上げ、それを支えるものとならなければ、それはキリスト教礼拝とは言えないのである。」（Ｗ・ウィリモン『牧会としての礼拝』１８頁）

＊「歴史的にも、教会の共同礼拝こそ、牧会的配慮とその行為がなされる第一義的な場と見なされてきた。／（中略）私たちの牧会は、この世で信仰によって生きることを志す『礼拝する共同体』worshiping community という文脈の中で行われる。牧会におけるこうした文脈を忘却することは、私たちの基本的視点や自己理解を喪失することであり、牧会の源泉であり手段となるものを失うことなのである。」（Ｗ・ウィリモン前掲書２５、２７頁）

・意図するとしないとに関わらず、また望むと望まざるとに関わらず、礼拝はつねに教育・牧会・宣教の実践の原点・モデル・リハーサルとなり、またこれらの実践の結果・結実・反映となる。



＊礼拝の構成・流れ、また諸要素は、すべてこうした領域・次元との関わりを持っている。例えば、賛美歌は、これらすべての領域・次元に関わる重要な要素のひとつである。

＊「神の民の歴史は賛美歌と共にありました。キリスト者たちは賛美歌によって神の御名と御業の偉大さをたたえ、主

イエス・キリストを告白してきました。賛美の声があるところにはいつも聖霊が働き、信仰の交わりが与えられてきました。賛美歌は私たちを信仰に導き、養い育てます。また困難や苦しみ、寂しさを乗り越えさせ、それに立ち向かう勇気を与え、宣教の奉仕へと送り出す力となります。」（『讃美歌２１』「まえがき」より／傍点は筆者）

・礼拝の副産物は必ずしもつねに「良きもの」であるとは限らないし、期待通りの結果を生むとも限らない。それゆえに礼拝に関わる者はその礼拝がどのような結果を生み出しているかを適切に反省・評価し、それはなぜか、改善すべき点は何かということをつねに吟味することが求められる。

＊「歴史は、儀式がその役割を果たし得たり得なかったりしたことが何度も繰り返し起こったという事実を示している。儀式は人間を教育することもあったが、人間を奴隷のような状態にとどめおくこともあった。問題のある儀式を改革するということは、たんにそれを廃棄するのでなく、より適切な信仰の儀式的表現によって修正を加え、問題点を新たなものによって置き換えるということである。牧師はつねに礼拝改革者である。その理由は、私たち牧師が変化それ自体に価値があるなどと信じているからではなく、礼拝の中のパターン化された物語や命令、象徴、身振り、そしてサインの中にこそ、キリスト者としての私たちの生の源泉であり、自己を確認する手段があることを知っているからである。礼拝におけるさまざまな儀式は教会を正しく形成するものともなりうるし、反対にそれを歪めるものともなりうる。だからこそ、私たちが礼拝を行う際には私たちの行為が私たちの信仰を表現しているのであるという事実に注意を向けなければならないのである。」（Ｗ・ウィリモン『礼拝論入門』９～１１頁／下線は筆者）

（２）礼拝と教育

Ａ．キリスト教教育とは何か

・キリスト教教育とは、Ｊ・Ｈ・ウェスターホフによれば、「われわれが個人として、また教会としてこのようのな神の目的を求めて生きつづけるように人々を備え、励ますいっさいのわざを含む」と述べている（『子どもの信仰と教会』８８頁）。

＊「人はキリスト者に生まれるのではない。キリスト者になるのだ。」（テルトゥリアヌス）

Ｂ．礼拝における教育について

・礼拝はキリスト教教育が行われる第一義的な場であり、広義の教育は知的言語的なかたちによるキリスト教信仰の伝達や応答のみならず、象徴的な行為や感覚的な経験を通しても行われる。

・教育は会衆の受動的な行為（聖書朗読や説教を聞くことなど）だけではなく、能動的な行為（会衆の賛美や祈りなど）においても行われる。

＊歴史的に言えば、シナゴーグ礼拝は主として律法教育のための場であり、キリスト教はこれを「み言葉の礼拝」というかたちで継承してきたと考えられている。

＊教会暦と聖書日課は、通年の教育プログラムとカリキュラムであるということもできる。

＊象徴的行為による教育として、例えば聖餐は、神に私たちを献げること、神からイエス・キリストを受けること、神に与えられたものを私たちが共に分かちあうこと、感謝し応答することなど、キリスト者の生の基本を体験的に教える営みとなる。

・教会は礼拝共同体であると共に教育共同体であり、会衆はそうした礼拝と教育を担う

重要な主体である。

＊「いずれにしてもそれぞれの教会の礼拝、そしてそれを実践する信仰共同体は何らかの教育を行っているのであり、教会が教育共同体という一面を持つことは否定しようのない事実です。そして私たちが望むのは良き教育共同体となることです。このことと関連してキリスト教教育の原動力について古屋正仁氏が記している一文を引用してみましょう。／「確かに教会教育は、共同体を維持発展させるために、次の世代を養うためになされるものです。しかし、その担い手が生き生きとした信仰を持っていなかったり、学習者に何かを教え込もうとしたりするだけでは、あまり多くのものを生み出しません。教会に集う人ひとりひとりが、生き生きとした信仰と、神の道に従おうとする気概とを持ち、それによって与えられる経験を、感謝とともに味わう生き方を志すことこそ重要で、それを心から求めようとする共同体に、神によって豊かな副産物として与えられるものなのです。」（季刊『ミニストリー』１２号、７７頁）／礼拝もまったく同じことが言えます。礼拝に集う人々の生き生きとした信仰こそ豊かな礼拝を生み出す源です。そしてそうした私たちの信仰によって献げられる礼拝こそ、その中に含まれる豊かな教育力を引き出す場となるのです。」（越川弘英『礼拝』１２１～１２２頁）

（３）礼拝と牧会

Ａ．牧会とは何か

・牧会とは、「教会を造り上げる」（第１コリント１４：４、２６）働きであり、森野善右門によれば、「教会を強め、支え、整え、建て、とりなし、癒し、一つにする働き」（「牧会」、『岩波キリスト教辞典』）である。

・牧会の内容には大きく分けて「共同体全体に関わる牧会」（財政や事務等も含む教会の中の活動や体制を整える働き）と「個人に関わる牧会」（カウンセリングや家庭訪問などを含む働き）がある。

＊英語の pastoral care は、羊飼いが個々の羊に関心を寄せると共に、群れ全体の行動にも配慮するという意味で、上記の２つの働きを共に含む用語と言えるだろう。

・Ｗ・ウィリモンによれば、個々人に対する牧会には、日常的な働きかけを通して霊的健全さを維持する「予防的・保護的牧会」というべきものと、人間の霊的情緒的健全さが破綻した際に求められる「治療的牧会」が存在するという。

Ｂ．礼拝における牧会について

・礼拝は共同体全体と個々人に対する牧会的な働きを含んでいる。一般的に言って、通常の主日礼拝は共同体全体に対する「予防的・保護的牧会」の働きに関わる面が強いが、葬儀の礼拝などは個々人に向けられた「治療的牧会」の面が強い。

＊礼拝の牧会的働きにおいては「予防的・保護的牧会」の重要性を認識する必要がある。その具体的な内容としては、キリスト教と教会共同体への帰属感、人生や世界に対するキリスト教的価値観とそれに基づく現実の解釈の涵養などが大きな意味を持つことになる（とくに後者の価値観や解釈の問題は、キリスト教教育と本質的に関連している／越川弘英『礼拝』１２４～１２６頁参照）。

・礼拝共同体は牧会共同体でもある。共に礼拝する人々が牧会にあずかる存在であると共に、相互に牧会する主体でもあることを認識することを体験化し意識化することは

重要である。

＊例えば、「執りなしの祈り」の内容や方法は、こうした牧会共同体としての教会、また個々人が牧会的働きに関わることを意識化することと関連して、十分に検討する余地があるように思われる。

＊会衆が共にそこにいるということ自体が牧会的な働きとなることも覚えておく必要がある。「見よ、兄弟が共に座っている。／なんという恵み、なんという喜び。」（詩編１３３：１）

（４）礼拝と宣教

Ａ．宣教とは何か

・宣教とは教会が外の世界に向かってイエス・キリストの福音を宣べ伝えるための様々な活動であり、その中には「伝道」「奉仕」「証し」などの働きが含まれる。

＊「宣教」という用語は日本のキリスト教会及び神学界において、未だに共通の定義を持つに至っていない。ここでは暫定的に上記の定義を用いる。

Ｂ．礼拝における宣教について

・礼拝は宣教の行われる場であると同時に、宣教の始まる場でもある。換言すれば、礼拝においては、「直接的な宣教」と「間接的な宣教」が行われる。

・「直接的な宣教としての礼拝」とは、礼拝そのものが伝道の場、あるいはこの世に対する執りなしや奉仕の場として用いられることを意味し、典型的な例としては「伝道礼拝」やその他の特定の奉仕や証しをテーマとして行われる礼拝が挙げられる。

＊聖書においても、礼拝の場が伝道の機会であったことが知られている（第１コリント１４：２４～２５、他）。

＊１８～１９世紀に起こった北米の「大覚醒」では「野外伝道集会」という伝道礼拝の形色が生み出された。この形式は「フロンティア派の伝統」（「講義Ⅱ－（４）」参照）となり、さらに現代では「シーカー・サービス・スタイル」（同上参照）の伝道礼拝が生まれている。

＊日本の場合、通常の礼拝においても未信者や新来会者を含む場合が多く、つねに「伝道礼拝」的な要素や配慮が求められる面があったと言えよう。

・「間接的な宣教としての礼拝」とは、礼拝が私たちに宣教への動機づけを与え、私たちをこの世における宣教へと押し出す場となるような礼拝を意味する。

＊礼拝におけるこのような面での宣教と関連する宣教的要素は、聖書、説教、祈り、賛美歌など、およそあらゆるものに見出せるが、とくに「奉献」と「祝福と派遣」は顕著な宣教的要素である。

＊「奉献」（献金）の主旨は神への感謝と献身の象徴であり、それはさらにこの世におけるキリスト者としての奉仕や証しや伝道の働きを想起させるものとなる。奉献は宣教というコンテキストの中で理解される要素である。

＊礼拝の最後に行われる「派遣」はキリスト者が宣教のわざに参与するために神によってこの世界に遣わされることを意味する。「祝福」は礼拝参加者に対する祝福というだけでなく、この世界に持ち運ぶべき祝福であり、キリスト者は祝福の運び手としての宣教者なのである。

（了）